

# 竹田眞主教の巻頭言集

東京教区時報 1992年12月～1994年1月

日本聖公会東京教区 広報委員会

## ヨハネ 竹田 眞 主教さんのこと

司祭 パウロ 佐々木 道人

竹田主教さんが、まだ神学校の校長時代、よくチャペルで礼拝の説教している時、ほほえましかったのは、説教を前列で公子夫人が大きくうなずきながら聞いている後ろ姿だった。不思議な雰囲気を持つご夫妻だった。

お二人の出会いは、聖アンデレ教会で、若い竹田司祭が説教した後、公子夫人が、「あんた信仰ないわね」と突っ込んだことが始まりだったと、楽しそうに先生は聞かせてくれた。

私が初めて竹田校長宅へ神学校での学びの希望を伝えにいった時のことである。校長宅の暖炉を背に先生が座り、私の右に仲介役の当時神学校の実習担当の教員だった鈴木育三さんが、隣の部屋の椅子に公子夫人がちょこんと座り、その御三人に向かって私は何時間も自分のことを話し続けた。記憶では皆さん、ほとんど言葉を挟まなかった。今思うと贅沢な傾聴のもてなしを受けた出来事だった。

雪のちらつく早春の日だった。

その時、公子夫人は一言も発しなかったが、後に「いのちの電話」の初代の電話相談の受け手であったことを知った。

子連れ神学生として家族寮に入寮した三年間、時折、公子夫人が突然ドアをあけ「いる～」と元気な声をかけられ、入り口でその日のおかずや、クリスマスのチキン、幼い娘に人形を手渡してくださった。

その後先生は、主教に選ばれ、なぜか目白台のカトリックの大聖堂で主教按手式を終えた後、私たちが聖堂の入り口の前で、主教さんを無理やり胴上げた思い出が、懐かしい。



△当時の神学生が書いた似顔絵を校長室のドアに貼ったのを先生は黙認されていた。

## 聖家族

### 『ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい』

クリスマス・カードで良く見られるのが「聖家族」の図である。幼児イエスとマリア、ヨセフの図である。聖家族以上に人気があるのが聖母と幼児イエスの図であるが、そこにはヨセフは見られない。

「聖家族」といえば敬虔で家族全員が温かい愛で結ばれる信徒の模範となる家庭像を期待するが、福音書のイエスの家族の実態はそれを裏切ることになる。イエスの家族はまさに崩壊家庭のように見える。福音書では父親ヨセフは影が薄く、いつのまにか姿を消してしまう。ルカ伝では「イエスはヨセフの子と思われていた」と記されている。

イエスが12歳の少年の時、宮詣りの雑踏で両親は彼を見失ってしまう。心配しながら探しまわる。ようやく見つけ出すと息子イエスは「父の家にいるのになぜわたしを探すのですか」と冷たく答える。宣教を始めるとイエ

スは家に寄り付かなくなる。マリアや兄弟姉妹が何度か呼び戻そうとする。「わたしの母、兄弟とはだれか」と、ここでもイエスの答えはつれない。カナの結婚式ではマリアに「女よわたしとあなたとのなんの関わりがあるのですか」とさえ言う。イエスは世間で言う良い息子ではない。マリアがかれを思うままに抱くことができたのは十字架から降ろされた遺体のイエスである。それが有名な「ピエタ」である。

聖家族は最初から社会的には家族のスキャンダルで始まる。結婚前の女性の妊娠である。まじめで敬虔な婚約者ヨセフは身に覚えのないことだった。マリアを傷つけないように「ひそかに縁を切ろうと決心した」。正しい男の問題処理方法である。悲しみと不信を自制してヨセフとしては、彼女を傷つけないように社会的には出来るだけのことをしたのだ。

ところがヨセフは夢の中で神の声

---

を聞く。「恐れずマリアを迎え入れなさい」。せつかく世間の醜聞にならないように内輪で処理しようとしたのに、神は家族の恥を公然とするように促す。しかしヨセフは静かにこれに従い、マリアと家庭生活を始める。

正しい男の社会常識や宗教の戒律に隠されていたヨセフの心の奥底にある愛の力が彼を動かしたのである。それが神の呼び掛けに呼応して「インマヌエル・・・神は我々と共にいます…」の誕生の出来事が始まるのである。

イエスの家族は、世間のうわさや通念を超えた深いところで神の愛と人間の心に授けられた愛で結ばれているがゆえに「聖家族」なのである。

(418号 1992年12月15日)



---

## 『心の貧しい人々』

顕現節第4主日以降の福音書は「山上の説教」である。(マタイ5章1節から)。その始まりの言葉が「心の貧しい人々」であるが、それに続く幸いな人々、つまり「悲しむ人」、「柔和な人」、「義に飢え渴く人」なども貧しい人々の特徴を示している。

降臨節も顕現節も神の「来臨の記念である」。神の子イエスは貧しい人の姿をとって生まれた。また主イエスの誕生に居合わせた人々も貧しい人だった。マリア、ヨセフ、羊飼、シメオン、アンナ。この人たちが、貧しい人と呼ばれたのは、必ずしも経済的に貧しかったのではなく、政治的、宗教的論争の騒ぎの中で静かに耐え忍びながら神の救いを待ち望んでいた謙遜な人たちだったからである。

預言者ゼファニヤの預言などにある「貧しいひとたち」。(アナウ

ーム)の姿をとっている。「苦しみ  
に耐えてきたこの地のすべての人々  
よ、恵みの業を求めよ、あるいは身  
を守られるであろう」(ゼファニヤ  
書2・3)

「苦しみに耐えている人々(アナウ  
ーム)」と呼ばれた忘れ去られた  
貧しい人たちこそ主の恵みに出会う  
という預言ある。そして主イエス誕  
生に立ち会った人々の中にこの預言  
の成就が認められる。

2月2日は被献日、シメオンとア  
ンナという貧しい老人が神殿で出会  
った幼児イエスのうちに主の救いを  
見て幸いな人々となった祝日であ  
る。現代の喧騒の世界で静かに主の  
救いを待ち望んでいる人々はどこに  
見出せるだろうか。

(419号 1993年1月31日)

---

## 『地の塩』

すべてのキリスト者は「地の塩」である。旧約聖書を手がかりにして「地の塩」の意味を考えてみよう。

「味のない物を塩もつけずに食べられようか」(ヨブ6・6)防腐剤や持味を引き立たせる調味料として塩は生活に不可欠である。

神殿宗教にも不可欠であった。「穀物の献げ物」「焼き尽くす献げもの」に塩が使われた(レビ2・13)。また旧約には「塩の契約」という言葉がある。「共に塩を食する」ということは人間同志の不変の関係、また神に対して不変の忠誠を誓う永遠の契約のことである。(民数記18・19)

ここで示唆される「地の塩」の役割は、

- 1 この世の防腐剤としてこの世の墮落を防止する役割が期待される。
- 2 すべての被造物の調味料として、それぞれ神によって与えられた本来の賜物が実現することに仕える使命

が課せられている。

3 当時の塩は死海でとれる岩塩である。不純物は味を失った塩として投げ捨てられ、踏みつけられる(マタイ5・13)。塩自身がまず本来の良さを発揮していなければならない。

4 さらに塩は塩だけで役に立つのではなく、他のものに溶け込み本来の形が消えた時その効力を発揮する。

神であることを固執しないで、人の姿をとってこの世に来られたイエスの働きを思い起こさせる。

(420号 1993年2月7日)

---

## 『腹を立ててはならない』

『山上の説教』(マタイ5章～7章)はイエスの教えの核心である。今日の福音書はその一部である。しかし私たちの普段の思いとは正反対の教えである。私たちはこれが大切な教えであることは認めるが、現実には適用不可能な理想論として棚上げにしているのが現状である。しかしイエスは現実には守ることのできない理想論など教えたのだろうか。もういちど、この教えを再確認する必要があるようだ。

「兄弟に腹を立てるものは誰でも裁きを受ける」。有名な神学者ドッドが翻訳した聖書では「自分の兄弟に対して怒りを抱き続けてそれを成長させるもの」と表現している。

憎しみと怒りに支配されて自分の心の中でひとりそれを増幅していくとその相手を無きものにしたいという衝動につながってくる。この怒りこそ「殺す」ことの動機である。イエスは

怒りの情念のなすがままに任せて腹を立て続けることの問題を指摘している。

『みだらな思いで』他人を見ることも同じである。快樂指向に支配され、身を委ねることは相手の人格を自分の欲望充足の道具にしてしまうことになる。今日の特祷は「憐みをもってこの世の悩みを顧み、いやしのみ力によって、人々と国々とを健全なものにしてください」と祈る。人間だけでなく、国家もこの教えを尊重すべきである。山上の説教は自分では制御出来ない怒りや欲望の支配からの解放の手がかりであることを再確認したい。

(421号 1993年2月14日)

---

## 『主よ、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです』

(マタイ17章4節)

降誕と顕現は神(キリスト)の来臨と出会いの記念である。しかし神との出会いの状態に私たちがいつまでも留まることは許されない。アブラハムの時以来、神に出会う体験は、「行きなさい」、「あなたを遣わす」という神のことばで終わる。聖餐式での神との出会いの体験も「行きましょう」「いでゆかん」で結ばれる。

エジプトから逃亡したモーセは神の山ホレブで神にであう。しかし再びエジプトに「行きなさい」と告げられる。

エリヤも預言者の仕事をあきらめて神の山ホレブの洞窟で神と共に暮らそうとする。そこで「おまえはそこで何をしているのか」「そこを出なさい」という神の声を聞き、彼を迫害する世界に戻って預言のつとめを続けるようにながされる。

ペテロは山の上で栄光に輝くイエスに出会った。そこにいつまでもいら

れるように「ここに仮小屋をたてましよう」と提案する。しかしイエスは山を降り、病に苦しむ民衆の世界、さらにエルサレムに向かう十字架の道を進む。ペテロも従わざるをえない。

私たちの所に来てくださったキリストは、今や私たちが派遣される所に先立って行かれる。この神に従うことができるのは、自分の力でなく出会いによって与えられた神の恵みによる。今週から始まる大斎節には先立つ主イエスに従うことを学ぶのである。

(422号 1993年2月21日)

---

## 『神を試す誘惑』

(マタイ4章11節)

信仰者であろうと誘惑は不可避である。問題はどのように打ち勝つかである。「神の子なら飛び降りたらどうだ」という誘惑に対してイエスは「神を試してはならない」と拒否する。私たちも時折この悪魔の立場で神を試みることがある。『神が全能ならば、神が愛ならば…こんなに苦しまなくてもよいはずだ…もっと幸福になっているはずだ…』と。悪魔に誘惑されることだけでなく、私たち自身が悪魔になって神を試そうとする誘惑というものがあるようだ。それは不安とか自負心の中で最も効力を発揮する。

イエスが十字架の受難と死を予告した時ペテロは「主よ、そんなことがあってはなりません」と強く否定する。イエスは「サタン、引き下がれ」と、ペテロを悪魔呼ばわりされる。しかし荒野の誘惑の時の「サタン、退け」とはニュアンスが違うようだ。荒野では「離れて行ってしまえ」であり、ペテロに対して

は「わたしの後ろに下がれ」と、なお従ってくることを前提としているようだ。

悪魔の立場になることは、自分自身の願望で作りに出した神のイメージに固執して神の真実に出会うのを回避することである。ペテロは自分のイメージを抱いていたので繰り返しイエスの真実の理解に失敗しイエスを最後まで裏切っているが、それでもなお「主よどこに行くのですか」と、主イエスの愛と許しを信じて従うのをやめなかっただけである。私たちも繰り返し悪魔になる誘惑に襲われるが自分の思いを超えてただイエスを仰ぎ見ることが誘惑に打ち勝つ道なのである。

(423号 1993年2月28日)

---

## 『夜イエスを訪れた男』

(ヨハネ3章1節～17節)

ニコデモは「夜イエスを訪れた男」(ヨハネ19・39)として記憶されている。ファリサイ派の教師で最高法院の議員でもある。戒律の忠実な実行だけでなく、それを解き明かす教師、しかも社会的には議員として尊敬されていた。当時のユダヤ教ではニコデモのような人物は神の救いが完全に保証されているはずだった。そのニコデモがある夜イエスを訪れたのである。彼のような権威者がナザレ出身の貧しい教師を訪れるのは、人目につかない夜を選んだのかもしれない。

ヨハネ伝では「夜」は意味深長な言葉である。イエスが神のみ心のために働くのが昼間であるが「誰も働くことのできない夜が来る」と受難の予告をしている。最後の晩餐の後ゲッセマネでこれから逮捕されようとしている時、特に「夜であった」(ヨハネ13・30)と付記している。ニコデモは理想的な宗教指導者だった。しかし何

か霊的欠如を感じていたらしい。救われるためには律法をより完全に実践し働くことによって救いに到達できるという信条に疑問が起こったようである。つまり彼は働くことだけで満たされない「夜」を感じたのである。そしてイエスを訪れて永遠の神の恵みに自分を解放する手がかりを与えられイエスの弟子となった。

その手がかりとは、自分を空しくして、すべてを与えて達成したイエスの救いの奥義である。働いて獲得するものでなく、与えることから始まるものである。イエスが十字架の死を遂げた時、葬りのため総督から遺体を引き取ったのはニコデモだった。

(424号 1993年3月7日)

---

## 『サマリアの女』

(ヨハネ4章5節～42節)

イエスは「私が与える水を飲む者は決して渇かない」と告げます。「ここに汲みに来なくてもよいようにその水をください」というこの世的発想しかできない彼女をイエスは霊の次元に導いていくのです。

村の主婦が井戸に来るのは早朝ですが、彼女は昼すぎに来ます。毎日井戸で水を汲む習慣が煩わしいようです。今同居している男は正式の夫ではなく、何かわけがありそうです。また「水を差し上げる身分ではありません」と答えます。抑圧と疎外の中で生きる目標を失い倦怠感で生きているようです。

イエスは、彼女の中に「私の魂は渇く」という叫びを聴き取り愛の力を発揮します。イエスとの会話の中で彼女はこの人こそ救い主と確信し始めます。そしてサマリアの同胞に宣教するようになるのです。

無意味な生活の中に安住していた

この女性が、イエスの憐れみによって新しく生まれ変わるのです。イエスは最初から彼女の生きざまをそのまま受容します。彼女はまずイエスの憐れみによって今の自分を乗り越える励ましを与えられました。そしてイエスに仕える福音の伝道者として成長したのです。「私は弱い信徒」、「私は無能な牧師」と嘆くことは一見謙遜な表現ですが、自分の弱さを美化して、それが美しい信仰生活かのように陶醉することがあります。そこには傲慢さが隠されていて、霊と真理の礼拝や宣教を目指す姿勢が欠如しています。サマリアの女の物語から大斎にふさわしい悔い改めと許しの真理を学ぶことができます。

(425号 1993年3月14日)

---

《大斎第4主日》

『**あの方が神のもとから 来たのでなければ**』

(ヨハネ9章33節)

信仰の中心は救いを待ち望む未来志向です。しかし、ヨハネの福音書は「初めに言があった」で始まるように「始まり」を強調します。今日の福音書もイエスが神のもとから来たのか、始まりについて議論しています。

安息日の戒律を神の命令として絶対視するファリサイ派は、安息日に盲人を癒して神聖な戒律を無視するイエスは神から来たものではないと主張します。盲目がいやされ、「見えない」状態から解放された男は、「あの方が神のもとから来られたのでなければ、なにもおできにならなかったはずです」と答えます。

もともと戒律や律法は、私たちの終わりと初めを超えて臨在される永遠に神秘的な神を礼拝する指針として設定されました。安息日に働きをやめることは、日常の仕事や生活に追われて自分自身を見失い神を忘れていた状態から立ち返り、自分の存在の根源で

ある神を再確認するためでした。ところが、律法の文章それ自体が絶対化されてしまうと、それが神の代わりとなり神ご自身を仰ぎみる必要がなくなります。永遠の神にたいして靈的に盲目にされてしまうのです。

戒律だけにこだわると、私たちも神の神秘に対して盲目になる恐れがあります。大斎第4主日は『母の主日』といって大斎の真中にひと休みにして母親のもとに戻って贈り物を届ける習慣がありました。私たちがどこから来たのか静かに黙想する日です。「力を捨てて、私が神であることを知りなさい」

(426号 1993年3月21日)

『ほどいてやって、行かせなさい』

(ヨハネ11章44節)

ラザロ復活の物語の結末は、ラザロに対する「解放」と「派遣」の力強いイエスの宣言である。

重病人のラザロは、二人の姉妹に介抱されながらイエスが見舞いに来て下さることだけを唯一の慰めとして生きていた。ところがラザロの重体の知らせを聞いたイエスは「なお二日間同じところに滞在され」、また「私がその場に居合わせなかったのは、…よかった」と語る。イエスが到着した時マルタもマリアも「主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに」とくやむ。そばにいて自分の弱さを支えて下さるようにとの切なる願いに対して、イエスは意図的に出発を遅らせ、神の栄光のため離れていることがよいことだと語る。

弱い自分にとって頼れる人が目に見える状態でそばにいてもらえることは願わしい。ラザロはこの願いがか

なえられず生きる望みを失って死んだ。しかしイエスに信仰的に依存することは、イエスが昇天で見えなくなる時「いつまでもあなたと共にいる」という約束の信頼である。あたかもイエスがいないような状態の中で共に居られるのである。これが私たち派遣されている者の、イエスを「証し」しながら宣教する世界である。ラザロの死と復活は自分の弱さをイエスが肉体的にそばにいてくれることで紛らわそうとする甘えの信心から新しい生命への新生である。

「ほどいてやって、行かせなさい」。このイエスの力強い言葉は、私たちに對する宣言でもある。

(427号 1993年3月28日)

---

《復活前主日》

『本当にこの人は神の子だった』 (マタイ27章54節)

これは「神の子なら、十字架から降りてこい」と嘲られながら死んだイエスの姿を見て告白したローマの百人隊長の言葉である。神の子が奇跡も起こさず殺害され、無力が明らかにされる。異邦人の百人隊長が、そのイエスを見て「神」の子であることに気付く。

イエスはユダから祭司・長老に、総督ピラトに、そして群衆に次々と引き渡される。この「引き渡し」こそ無力の典型である。はじめは能動的な「……する」イエスが、やがて「……される」受け身のイエスとなる。まさにイエスの受難の姿である。イエスは人々のなすがまま処刑される。しかし、神に見捨てられたような状態の中で、神の臨在のしるしが認められる。神殿の「垂れ幕」が真っ二つに裂けた(マタイ27・51)ということは、神と人との間を隔てる象徴が破られたことを示唆する。罪人が神に近付ける和解の道が開かれたのである。

イエスの受難物語は、神など存在しないと思わざるをえない状況(現代でもその状況は随所に見られ、私たちが体験することがある)にも神はなお生きて私たちを限りない愛で見守っておられることを告知する。イエスの死の姿の中にすでに神の愛の勝利、復活の前兆が認められる。昔から教会では無力なキリストの二つの像は一馬小屋の幼子のキリストと十字架上のキリスト—神の子イエスのみ姿として信仰者の最高の崇拜の対象となった。受難物語を読みながら、神の愛のみ業を思い巡らすことをお勧めしたい。

(428号 1993年4月4日)

---

《復活日》

『「思い違い」からの解放』 (ヨハネ20章1節～10節)

ヨハネ伝では弟子たちがよく『思い違い』をする。ニコデモは「新しく生まれなければ……神の国を見ることは出来ない」というイエスに「どのようにしてもう一度母の胎に入れるか」と聞き返す。サマリアの女性は「永遠に渴かない水」について「井戸に汲みに行かなくてもよいようにその水を下さい」という。マリアとマルタはラザロの死に際して、墓の石を「取りのけなさい」というイエスに、「もう死体は腐っています」と答える。イエスの使信は、死がすべての終わりと決めつけてしまっている私たちの絶望が思い違いであることを気付かせる。復活はその決定的な証しであり、神の愛は死よりも強いという『喜びのしらせ』(福音)の中心である。

イエスの墓で遺体がないのに気付いたマグダラのマリアは盗まれたと思い違いする。イエスが現れても園丁と思い違いする。さらにイエスだと分か

ると抱きつこうとする。イエスは「私にすがりつくのはやめなさい」という。彼女はイエスの復活をこの世の生活に戻ったものと思い違いをする。

私たちも『思い違い』の世界に生きている。イエスは死で閉じ込められた人間を解放するため同じ人間の姿を取って生まれた。だからイエスは思い違いをする人びとを許し、その束縛から解放して下さい。この思い違いの世界の中でなお死に脅かされながら、イエスの復活は死を超えて神の永遠の愛の支配を確信させる。「上にあるものに心を留めなさい」。

(429号 1993年4月11日)

---

《復活節第2主日》

## 『ご復活の夕』

よみがえられたイエスは、ユダヤ人を恐れて鍵をかけ、息を殺して家に閉じこもっていた弟子たちに現れる。「あなたがたに平和があるように」。弟子たちは歓喜する。しかしイエスは続けて「あなたたちを遣わす」と弟子たちを派遣する。聖書ではいつも神との出会いは神からの派遣に続く。この復活の夕方の物語はエリアの物語を思い起こさせる。迫害されて命を狙われるエリアは神の山ホレブの洞窟に逃れる。恐れたエリアは預言者の使命を放棄して神の山の洞窟に閉じこもる。そこで神との孤高な生活を楽しもうとする。しかしそこで聞いた神の声は「そこを出なさい」「行きなさい」であった。

イエスが処刑されて墓に葬られたとき、弟子たちはこの世の煩わしさから離れた閉ざされた宗教集団を作ろうと考えていたようだ。イエスの墓を記念碑にして偉大な霊の人イエスを

偲びながら密かに慰めあう集団である。復活のイエスの顕現はそのような弟子たちの夢を破って、イエスを殺せと叫んだ人々のいる世界での宣教を委託する。創世記の人間創造の時に人の鼻に神の命の息を吹き込まれて生きたものとされたように、イエスは「息を吹きかけて…」弟子たちに聖霊を息づかせる。弟子たちも復活を証しする宣教者としてイエスの派遣に応える力を授けられる。

やがてペテロは「神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です」(使徒言行録2・32)と語る。

(430号 1993年4月18日)

---

《復活節第3主日》

『エマオの夕』

復活節第3主日福音書(A年)は復活のイエスが二人の弟子にエマオで現れた物語である。彼らがイスラエルの救い主と信奉していたイエスが十字架で無残な死を遂げたので、暗い顔つきで論じ合いながらエルサレムを去ってエマオへ向かって行く。途中ずっと一緒だったが二人はイエスだと気付かない。

ルカの福音書が伝える復活のイエスの顕現は、期待が裏切られて破れたときに起こる。遺体に香料を塗ろうと墓に駆けつけたら遺体が無くなっていて、婦人たちがその期待を破られた時、復活のメッセージを聞く。エマオ途上のクレオパともう一人の弟子は、イエスを救い主と信じていた信頼が破れたとき、イエスが語りかけてくる。

イエスご自身エマオの宿の夕食でパンが裂かれたとき、(後に聖餐式において裂かれたパンは破れたキリストの体のしるしとなるのだが)「二人

の目が開け」ずっと道づれだったこの見知らぬ男がイエスだと悟る。「パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになったとき……二人の目は開け、イエスだと分かった」。私たちは聖餐式を捧げるたびにこのことを想起する。「主イエスよおいで下さい、弟子たちの中に立ち、復活のみ姿を顕されたように私たちの内にもお臨みください」と。

しかし、主イエスだと気付くとただちに「その姿は見えなくなった」(ルカ24・31)なぜイエスと気付いた「復活のみ姿」が直ちに「見えなく」なったのだろうか。

(431号 1993年4月25日)

---

≪復活節第4主日≫

## 『神学教育の主日』

復活節第4主日は神学校のために祈り信施を捧げる「神学教育の主日」である。聖書日課は使徒言行録のステファノ物語が朗読される。使徒言行録は『使徒』を十二弟子だけに限定する。「イエスと十二使徒」の理想的な時代と十二使徒以後の時代とを区別するためである。イエスと十二使徒の時代はイエスがいつもそばにいて直接助けて下さったので宣教には財布も袋も不要だった。

ところがイエスが昇天されて弟子たちから去ると状況が一変する。最後の晩餐のときイエスは「今は袋も財布も持ちなさい」と弟子たちに告げる。教会は人間の罪や弱さにつまずきながら宣教を遂行しなければならなくなった。

これがステファノ物語の“執事”の任命と殉教の背景である。

教会の会衆の間の対立や苦情、弱者を軽視する事件が起こる。理想的に

はいかなくなった教会の歴史の始まりを示唆する。現在の教会も同じである。ステファノの使命はこのような教会での牧会である。また外の世界からは反対や迫害で脅かされ苦難と殉教に直面する。教会が『使徒的』と言われるのは、イエスと十二使徒の理想の状態を受け継いでいるからではなく、理想的にはいかない教会の現実で求められる新しい司牧の奉仕職を制定した使徒の意図を伝承しているからである。

神学教育はステファノと七人の執事のような、罪の世界の現実の中で神の愛を証しするキリスト者の群れを司牧する、信仰と聖霊に満たされた司牧者の養成である。

(432号 1993年5月2日)

---

《復活節第6主日》

## 『罪人の 制御できない心』

今日の特祷は大変古く、5世紀の  
教皇ゲラシウス一世にさかのぼると  
言われる。当時の世界情勢はローマ  
帝国は東西に分かれ、民族大移動で  
荒廃していた。教会は論争に明け暮  
れ、東方のビザンチン教会(東方正教  
会)と西のローマ(カトリック)教会の  
分裂は決定的となった。平安の回復  
は人間の業では不可能である。

「罪人の制御できない心を治められ  
る方はあなたのほかにはありません」  
という特祷の背景である。今週の月、  
火、水は昇天前祈祷日。これも5世紀  
の噴火や飢饉の際の嘆願祈祷に由来  
する。

現代世界もおびただしい難民の移  
動、民族間の闘争、民衆の悲惨な犠  
牲、分裂的な教会内の論争、地震や噴  
火など自然の災害と破壊、多くは私た  
ち現代人の「罪人の制御できない心」  
の業の結果といえる。

やがて主の御昇天を迎えるが、先週

と今週の福音は別離を前にして不安  
に満ちている弟子に対するイエスが  
彼らを見捨てない約束である。神に見  
捨てられたような世界で罪人の心を  
治めることの出来る神の見守りを証し  
するのが現代世界に生きるキリスト者  
の使命(ミッション)である。

旧約日課では「苦しむ人、貧しい人  
は水を求めても得ず、渴きに舌は干上  
がる」という災害の中で「イスラエル  
の神であるわたしは彼らを見捨てな  
い」という人類救済の神の固い決意に  
ついて、(第二)イザヤの希望の預言  
が告げられる。

(433号 1993年5月16日)

---

《復活節第7主日》

## 『神の栄光』

ヨハネ伝の17章1節から11節では「栄光」という言葉が6回も使われており、ここでは「栄光」はキー・ワードである。「栄光」とはこの地上の世界での（天上の世界でなく）神の臨在の表象である。旧約聖書の長い歴史を通して神はいつも神の民と共に臨在した。人々と共に臨在する神の栄光はイエスにおいて完全に表されたというのがヨハネ伝の教えである。イエス・キリストこそ「神の栄光」である。「父よ、…あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください」（ヨハネ17・1）とイエスは祈る。父なる神の栄光はその子イエスによって現される。

十字架の処刑の前夜、最後の晩餐が終わり、イエスは弟子たちに別離の説教をする。そのあと憂いに沈む弟子たちのためにイエスは父なる神に『大祭司の祈り』と呼ばれる代祷を捧げる。今日の福音書はその一部である。

この祈りの中で特に注目したいのは10節の「わたしは彼らによって栄光を受けました」というイエスの言葉である。今やこの地上の世界で神の栄光を現すものは弟子たちなのである。その弟子の後継者である私たちすべてのキリスト者が神の栄光を現すのである。神の愛、神の平和、神の慈しみ、神の正義をその生活と行動の中に反映させることによって、この地上に神の臨在を証しすることである。現在の教会でも、イエスが神の栄光を現したように、イエスの栄光は弟子たち（すべてのキリスト者）によって現れるのである。

（434号 1993年5月23日）

---

《聖霊降臨日》

## 『一同が 一つになって 集まっていると…』

(使徒言行録2章1節)

「聖霊」は私たちの伝道の働きを促しました励ます神の見えない力である。この聖霊が授けられるのは弟子たちが絶望したり諦めている時ではなく、大きな期待で神の来臨を待ち望みながら熱心に祈っている時だった。聖霊降臨は「彼らは皆…心を合わせて熱心に祈っていた」時である。(使徒言行録1・14)。昇天直後の弟子たちは「あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、…またおいでになる」という言葉を信じてひたすら祈って待ち望んでいた。

たしかに聖霊降臨は突然の出来事だったが、同時に、弟子たちが一体となって捧げていた熱い祈りへの神の応答と約束の成就として起こったことである。そしてこれが動機となって、「地の果てにいたるまで」主イエスの福音を証する伝道活動が開始され、驚くべきエネルギーに満たされて

キリスト教が世界の教会として展開していったのである。

福音伝道の働きはもちろん教会のあらゆる活動は、聖霊に力付けられてはじめて適切に遂行される。聖霊の体験なしには教会の働きは空虚である。様々な委員会の討論も制度や設備の改善も、聖霊の声に従うことが前提である。この聖霊の励ましを受ける状態とは「皆心を合わせて熱心に祈っている」ことであることを、使徒言行録の聖霊降臨の物語ははっきり伝えている。今の私たちは、聖霊の降臨にふさわしい状態になっているだろうか。

(435号 1993年5月30日)

---

《三位一体主日》

## 『三位一体の神』

キリスト教の神は「三位一体」の神である。この言葉は聖書にはないが、常に神秘的でしかもその憐れみによって多様な姿をとって働く神を表現する言葉である。

「わたしは主である。わたしはアブラハム、イサク、ヤコブには全能の神として現れたが、主というわたしの名を知らせなかった」と神はモーセに告げる。モーセはそれまで長く伝承されてきた「全能の神」としての理解を超えたもっと深い神の真理に気付く。それは天上に鎮座する不動の神ではなく、人の苦難の叫びに動かされて、救いのため人間の姿を取ってこの世に降るみ子イエスに示される神の予告である。神は不変ではなく人間の状況に応じて多様な動きをする。

神を信仰することは神を完全に理解することではなく、いつも人間の知性を超えた神秘の神を認めることである。すべての神学書に精通しても私

たちが理解できる神はほんの氷山の一角である。日々新しく現れる神秘的な神を古代の神学者は単なる「神」でなく「三位一体」の神と賛美した。

正統信仰のことを英語でオーソドクシーというが、これは「正しい頌栄(父と子と聖霊の賛美)」という意味である。三位一体の神は、人間の理屈だけではなく、礼拝や祈り、感謝と賛美、嘆願と告白など霊的な行為を通して表現する。三位一体主日には「聖なる、聖なる、聖なるかな、三つにいまして一つなる、神の御名をば…讃めまつれ」と、理屈では説明出来ない表現で賛美をささげる。

(436号 1993年6月6日)

## 『教会暦を学ぼう』

祈祷書が改正されいろいろ戸惑うことがあるが、特に判りにくいのが教会暦の決め方。従来は1年間の暦が主日ごとに特祷・使徒書・福音書全文が祈祷書に記載されていた。新しい祈祷書の教会暦はA年、B年、C年と3年のサイクルで変わる(今年はA年)。しかもそれが別冊となっている。とくに困難なのが聖霊降臨日以後の特祷と聖餐式聖書日課の捜し方。以前は聖霊降臨日が終わると三位一体節が年末の降臨節までずっと続くので比較的判り易かった。新しい教会暦では三位一体節は廃止され、聖霊降臨節となる。聖霊降臨日の次の主日は聖霊降臨後第1主日。この主日は三位一体主日とも呼ばれる。主日の特祷と聖餐式聖書日課はその週間はずっと使用されるのが普通だが、この週だけは別である。例えば今年の三位一体主日翌日の月曜日は6月7日。特祷は「6

月8日に最も近い主日、週日」ということで「特定5」(祈祷書227ページ)となる。土曜日までこれを使用、今日(6月13日)は聖霊降臨後第2主日で「特定6」となる。今日から聖霊降臨節。これを機会に教会暦の学習会をお勧めしたい。クリスマスがなぜ12月25日か、イースターの日付はなぜ毎年変わるのか、聖人記念日の由来など教会暦の研究はなかなか面白い。

聖霊降臨日から降臨節まで聖霊降臨節である。イエスのご生涯のみ業、受難・死・復活昇天に基づいてキリスト者ひとりひとりがまた教会の礼拝と証しと奉仕を聖霊に励まされながら実践を試みる季節である。

(437号 1993年6月13日)

『わたしはあなたがたを遣わす。…だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい』  
(マタイ10章16節)

弟子を宣教に派遣する時のイエスの訓示である。福音書が書かれた時代(70年から90年頃)の教会は大変革の時期であった。ご昇天の直後(30年頃)には主イエスは明日にでも再臨するという緊迫した状態で、弟子たちは天国を待望していた。そこではもはや職業や日々の生活、結婚、家庭などの思いわずらいは必要なかった。純粋な信仰生活の中でひたすら祈りながら主イエスの再臨を待っていれば良かった。

しかし何年待っても再臨は起こらない。神の国到来は当分ないかも知れない、あるいはいつ来るか分からないという状態になった。それが70年から90年の弟子の共同体の状態だった。信仰生活と教会のあり方に危機が起こったのである。

教会は社会の宗教教団として存続を考えなければならなくなった。イエスの教えも、口伝えでなく文書にして

保存されるようになる。「イエスこそ救い主キリストである」という告白と社会に対する弁明と宣教が必要になる。当然外部社会から迫害や反対が起こる。教会内部も誤った考えや対立が起こる。今日の教会と同じ状態になったのである。

悪意や憎悪に満ちている現実の社会の中に教会は存在するようになり、そこで通用する宣教の言葉が必要になる。鳩の純真さと同時に蛇の賢さが求められるようになる。このイエスの言葉は、この時期の教会の状況を反映している。

(438号 1993年6月20日)

---

《聖霊降臨後第4主日》

『また自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない』  
(マタイ10章38節)

マタイ福音書の資料として使われたマルコ福音書は新約聖書の四福音書の中で最古と言われる。この福音書は終わりの16章9節以下は括弧がつけられている。この部分は後世の追加ということである。従ってマルコ伝にはもともとイエスの実際の復活の記述はない。遺体のない墓と復活してガリラヤに行かされたという天使の告知だけで実際に復活の描写はほかの福音書と違って書かれていない。

教会が次第にギリシャの世界にも広がると、復活によってすべての苦難は帳消しになり、十字架の苦難なしに神の祝福の境地に入ることが出来るという観念が広まったようだ。復活によって十字架は不要になったという理解である。マルコ伝はそのような観念に警告する意図で、もういちどイエスの十字架の生涯を再確認させるために敢えて復活の描写を省略したよ

うである。パウロも「復活はもう起こったと言って、ある人々の信仰を覆している」と十字架なしの復活理解を非難している。

今日の福音書は前週に続いて弟子を宣教に派遣する時の訓示である。宣教において周囲からの反対と苦難、奉仕のための自己犠牲は避けられないことを予告して、「十字架を担うこと」を指示する。宣教ということはイエス・キリストの復活昇天だけではなく、十字架の受難と死を含めた全生涯の証しである。十字架を回避した復活はありえない。

(439号 1993年6月27日)

---

《聖霊降臨後第5主日》

『善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまわっているという法則に気づきます。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう』

(ローマ7章21、24節)

ローマの信徒への手紙7章と8章は是非ゆっくり読んでひとりで瞑想したり、信仰の友や牧師と語り合うことをお勧めしたい。福音理解の鍵となる大事で感銘的な聖句である。

パウロは自分のうちに二つの法則があるという。一つは神の法則もう一つは罪の法則。「善をなそうと思う」法則と自分の望まない「悪を行う」法則。普通私たちが悪を行うことと善を行うことを考える時、人間だから道徳的に良心に反したこともするが、良いことも行っていると自分の日々の言動をバランスシートのように比べて反省したり満足したりする。パウロはこのような意味で善悪を語っているのではない。自分ではどうすることも出来ない「法則」があるのだと告白して、「なんと惨めな人間なのだ」と嘆いている。

この罪の法則を取り除くのは自分の力でなくイエス・キリストを通して働

く神である。

パウロは改心以来いつも惨めな人間である自分の弱さにこそ働く神の愛の力を体験した。この体験を彼はコリントの信徒への手紙Ⅱ12章1～10節で述べている。そこでは「自分の弱さを誇る」とさえ語っている。

今日の福音書ではイエスは宣教に派遣した自分の弟子について「知恵ある者や賢い者でなく、幼子のような者」に福音を啓示された父なる神に感謝を捧げている。

(440号 1993年7月4日)

---

《聖霊降臨後第6主日》

『種まきのたとえ』 (マタイ13章1節～23節)

「イエスはたとえを用いて…多くのことを語られた」(3節)イエスの語る「たとえ」は神の国の深遠な奥義を聴衆の日常体験を比喻に使って判り易く教えるために使われたということではないようだ。神の国についてあたかも『なぞ』として内容をますます判り難くするために語られているような印象を与える。聴衆がもっと意味の深みを掘り下げていくために自分で思索することを促しているように思える。

種まきのたとえも同じである。種まきのたとえは「心の中に蒔かれたもの」(19節)というように、神の国の言葉が蒔かれた信仰者の心のあり方を語っている。それは教会にいる兄弟姉妹たちを見回して、信仰者を4つのランクにわけけるための基準ではないようだ。むしろ信仰者となった自分自身の心の中にみ言葉をさらに深めることを妨げるものは何かを考える基準として

聴く方がふさわしいたとえである。自分の心に、蒔かれた神の言葉を食べてしまう「鳥」は何か、み言葉を深く根づかせない「石」は何か、み言葉を枯らせてしまう「日照り」は何か、み言葉をふさいでしまう「茨」は何か、自分の内面をみつめて冥想することを促しているようだ。

自分の信仰の成長への障害を祈りながら取り除くことによって、最初に蒔かれたみ言葉は、ただ知的な理解だけでなく自分の生命全体に充実し、さらに自分の思いを超えて何倍にも成長して行くものであることを「種まきのたとえ話」は示唆している。

(441号 1993年7月11日)

---

《聖霊降臨後第7主日》

『忍耐して待ち望む』（ローマ8章25節）

キリスト者の信仰生活にはすでに神の子とされ霊に生きている側面と、まだこの世で肉の弱さを負っている側面があり、「すでに」と「まだ」の間で生きている。

パウロは、信仰者といえどもまだ苦難から完全に救済されていない現在の苦しみの現実をはっきりわきまえている。パウロは熱狂的聖霊信仰には同調しない。彼らは、自分たちがこの世の苦悩や罪から離脱して、天国の祝福を享受する神聖な人になったと独りよがり幻想し、罪に抑圧されて苦しむ人々を神から見放されたものと断罪する。むしろ信仰者の苦難こそ、キリストのいのちにあずかっていることのしるしである、とパウロは言う。

パウロはこのあと、弱い私たちを共にうめきながら助けて下さる「霊」のとりなしの働きについて語る。（次主日使徒書参照）。霊によって神の子とされ、苦難にあずかることによってキリ

ストと共にあることを確信しつつ、神の子の栄光にもあずかることを待ち望むのである。

今の時の苦しみは無意味なものではなく、キリストの苦しみにあずかっていることだからである。教会も信仰者一人一人も完全に聖化されているわけではなく、現在は罪人と聖人を併せもつ成長の過程にある。

最後の裁きは神ご自身に委ねるべきである。私たち自身のうちにより麦と共に毒麦が植えられている事実を認識し、神の裁きに委ねることが必要である。

（442号 1993年7月18日）

---

《聖霊降臨後第8主日》

## 『使徒聖ヤコブ』

7月25日は使徒聖ヤコブの記念日である。(最近の教会暦は日曜日を優先するので聖日が日曜日に当たる場合は一日延期して26日になる)。

イエスの十二使徒にはゼベタイの子(ヨハネの兄弟)ヤコブとアルファイの子ヤコブと同名の弟子が二人いる。後者はフィリピとともに5月1日に記念される。新約聖書にはもうひとりヤコブがいる。イエスの兄弟ヤコブである。マルコ伝6章3節やガラテヤの信徒への手紙1章19節などに出てくる。使徒行伝では最初のエルサレム教会の最高の指導者となり、後に初代のエルサレムの主教といわれるようになる。

きょう記念するヤコブはヨハネの兄弟ゼベタイの子である。彼は十二使徒の中では最初の殉教者である(使徒言行録12・2)。かつて兄弟ヨハネと共にイエスのもとに来て「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人を右に、

もう一人を左に座らせて下さい」と野心的な願望を表明する。他の弟子たちはそれを聞いて憤慨するが、イエスは「何を願っているのか分かっていない」と告げる。

ヤコブの野心的な願望はイエス・キリストの愛で聖別され、他の弟子たちに先んじて殉教者として神の栄光にあずかることになる。自己中心的な私たちの祈りもみ心によって聖別され、神の答えは私たちの思いを超えたものとなる。中世の伝説によると彼の遺骨はスペインに移されて埋葬されたという。スペインでは最も崇拝される聖人である。

(443号 1993年7月25日)

『**五千人の養いの奇跡**』

(マタイ14章13節～21節)

イエスが五千人の人々の空腹を満たした物語はどの福音書にも伝えられている。奇跡の中でも神の素晴らしい愛を体験した出来事として広く人々の間に語り伝えられたものと思う。神は内面の精神的な生き方だけでなく、人の肉体的な飢えにも注意を向け食物で満たすことにも関心をもたれる。エジプトを脱出したイスラエルの民はシナイの荒野を40年も放浪した。これは神が「人はパンだけで生きるものではない」と言うことを教えるためだったが(申命記8・2～4)、その間でも飢えに苦しむとマナを与えて満たされた。肉体的必要を満たす群衆を「深く憐れむ」(14節)神の愛によって奇跡が起こる。

他方群衆の中に協働者がいる。パン五つと魚二匹をイエスのもとに持ってくる者がいた。イエスは「取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡し、群衆に与えた」(19節)。こ

れは聖餐式の奉献、聖別、パン裂き、分餐を連想させる用語である。今日の世界の飢えに神は無関心ではない。その飢えを満たす奇跡のために、神の愛に応答する行動が私たち求められている。聖餐式の言葉と行為はその規範である。これが日常の経済生活に適用されるならば、現代世界の多くの人々の飢えを癒す奇跡となる。これは神の一方的行為だけでなく信仰者の応答による奉仕によって起こる。日々の生活の中でパンを神の賜物として感謝賛美を捧げ、これを裂いて分かち合いと与えるということが実践されなければならない。

(444号 1993年8月1日)

---

《聖霊降臨後第14主日》

**主よ、どうか主の民に世と肉と悪魔との誘惑に打ち勝つ恵みを与え、清い心と思いをもって、唯一の神に従うことができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン**

伝説によればこの特祷は紀元5世紀末の教皇ゲラシウスI世が編集した sacrament 式文に秋期聖職按手節(9月14日の週の水、金、土曜日、現在の祈祷書では特定19か20となる)の主日の特祷とされていたものである。

昔の司祭按手式には按手される執事に「なんじ…力を尽くしてその身をこの職にゆだね、一心にこれに従事することを神の恵によりて決心したるならん」という主教の説示がある。この特祷の最初の文章の直訳は「主よ、あなたの民に悪魔の感化を避ける恵みを与え…」である。このような決心によって聖職の務めを遂行するならば、悪魔にとってはその司祭を見過ごすわけにはいかず、あらゆる手段を使って妨害するであろう。

聖職は悪魔の誘惑の標的である。

聖職按手節に先立つ主日に、全会衆にこのような祈りを捧げるように求めたのがこの特祷の由来である。

英国教会では1662年の祈祷書でこの祈りを聖洗式の誓約の遂行のための祈りとして、すべての信徒の信仰生活を支えるために神の恵みを求める祈りに変えた。信徒の洗礼の誓約の忠実な実践も悪魔の関心である。教会の交わりにおいて、愛と赦しの実践が悪魔の妨げを避けるために必要であることを今日の使徒書と福音書は教えている。

(445号 1993年9月5日)

---

《聖霊降臨後第15主日》

## 『弱い信仰と強い信仰』

ローマの信徒への手紙14章全体のテーマは信仰の弱い人と強い人。この教会には何を食べても差し支えないという信徒と、肉も食わず酒も飲まずにいる信徒がいた。一定の日を特別に神聖な日として尊重する信徒と、どの日も同じだと考える信徒がいた。従来戒律や慣習にこだわらないと気がすまない信徒と、キリスト者はそういうことから解放され自由なのだと主張する信徒がいた。パウロは戒律やしきたりにこだわる信徒を「信仰の弱いもの」自由を主張する信徒を「信仰の強いもの」と表現した。これは誤解しやすい言い方である。信仰の優劣ではなく、信仰の持ちかたの違いを言っているだけである。

自分の信仰のあり方を絶対化すると他の信仰の持ち方を裁くことになる。「なぜ自分の兄弟を裁くのですか」(10節)。

ローマの教会でも、信仰の持ち方の

違う信徒同士がそれぞれ信仰の持ち方の正当性を主張して、自分と違った信仰のあり方を断罪して対立が起こった(教会内の対立は今日にいたるまで基本的には同じものである)。そのような対立が起こったローマの教会の信徒に、パウロは「ある日を他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいます。各自が自分の心の確信に基づいて決めるべきことです。特定の日を重んじる人は主のために重んじる。食べる人は主のために食べる。…食べない人も、主のために食べない。そして神に感謝しているのです」と書き送った。

(446号 1993年9月12日)

## 『神の公正の神秘』

今日の福音書のメッセージは「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」である。早朝から12時間働いた日雇い労働者も、夕方から雇われて1時間しか働かなかった者も、皆一日分の報酬を雇主が支払ったというたとえ話である。わたしたちは労働の報酬を他人との比較で公平かどうか決める。人間社会の給与規定の原則に従えばこの雇い主の報酬は公正を欠く。「まる一日、熱い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは」と他人と比較して抗議する。

有名な『放蕩息子』のたとえでは、いつも父親に忠実に仕えていた兄が、放蕩のはて相続分を使い果して戻ってきた弟のために宴会を催して喜ぶ父親に抗議する。人間の社会通念でこの兄弟の行状を比較すれば、当然の抗議である。ところがわたしたちがこの話を聞いて感銘するのはなぜだろうか。

わたしたちに対する神の恵みはわたしたちの善行や信心の量の多少によるものではなく、わたしたちの砕かれた心である。このたとえ話はファリサイ派に対する警告である。ファリサイ派は戒律順守でも善行でも最も優れていた。善行の量からいえば神からの報酬は最も大きいはずである。しかしイエスは罪人や異邦人の方がファリサイ派よりも神の国にふさわしいと告げる。イエスと共に十字架で処刑されて悔い改めた犯罪者に許しが告げられる。神の無限の恵みの前ではわたしたちは皆、後から来て雇われた者なのである。

(447号 1993年9月19日)

---

《聖霊降臨後第17主日》

## 『「二人の息子」のたとえ話』

先週の福音書と同じように今週のたとえ話も場面はぶどう園。しかし語られた場所は今回は神殿の境内、時はイエスのエルサレム入城の後、十字架の受難は数日後である。今週、来週、再来週の福音書の三つのたとえ話はみなこの時神殿でイエスが長老、祭司など神殿宗教の権威者に挑戦的に語ったものである。これらのたとえ話はみな同じテーマである。つまり口先の言葉では服従を表明しながら結局は不忠実な息子や僕たちと、一見不忠実でありながら最後は服従する者たちを対照している。今日の福音書の話では、二人の息子を持った父親が「ぶどう園で働きなさい」と命令する。兄は「いやです」と答えたが後で考え直して働く。弟は「お父さん承知しました」と答えたが実行しなかった。

当時のユダヤ教では神は最初すべての人類に神の律法を授けたが、こ

れを受け入れたのはイスラエルの民だけで後はみな拒否したと理解していた。イスラエルの民が異邦人を罪人とするのはそのためである。徴税人や娼婦も同じ民族ではあるが律法に不忠実な罪人とされた。そのようにして当時罪人として差別されたり、苦しむ人たちに神の国への道を開くことがイエスの宣告した神のみ心である。使徒書では神の身分でありながら僕の身分となったキリストへの讃歌が歌われている。このたとえ話は「ところで、あなたたちはどう思うか」という質問で始まる。わたしたちもこの日課をよく味わって思い巡らそう。

(448号 1993年9月26日)

『神の選民と神の裁き』

イザヤは収穫の祭の時、即興詩人のように、賑わう群衆の中で、この預言を歌ったらしい。「わたしは歌おう、わたしの愛する者のために そのぶどう畑の愛の歌を」と。花嫁に引き合わせる花婿の友人の愛の歌で始まる。花婿は神である。丘の上に精進込めて手入れをした素晴らしい彼のぶどう畑は、今やうまいぶどう酒を作り出す最高のぶどうの実の収穫を待つばかりであった。ところが実ったのは未熟の酸っぱいぶどうだった。続いて語り手は、ぶどう畑の所有者、花婿自身(イザヤ5・3)。ぶどう畑は神が選んだ神の民。ユダヤ民族は神の選民としてみ言葉に忠実である限り繁栄を約束されるが、今は墮落して不忠実となり、滅亡の道を歩んでいる。愛と喜びの歌は突然不吉な歌となる。聴衆も失望する。「わたしはこのぶどう畑をどうするか。囲いを取り払い焼かれるにまかせ、石垣を取り崩し、踏み荒らされるに

まかせ、わたしはこれを見捨てる」。

今日の福音書の「ぶどう園と農夫のたとえ」を語るイエスはこの「ぶどう畑の歌」を思い起こしている。「息子なら敬ってくれるだろう」という期待で神は不忠実な民に自分の息子を派遣するが、農夫たちは彼を殺してしまう。このたとえはイエスの十字架の受難の数日前にエルサレムの神殿で祭司長や長老たちに語られた。「だから言っておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる」。

イザヤの預言もイエスのたとえも、神に選ばれたと自認している人々に語られたものである。今の教会はこの裁きから免れているだろうか。

(449号 1993年10月3日)

『主において常に喜びなさい』

ここで言う「喜び」とは、必ずしも笑う、歌う、飲み食い、冗談というようなことではない。また人気、成功、物質的に豊かであるということでもない。もちろん「喜び」を持つクリスチャンはしばしばこのような体験もすることもある。

「常に喜びなさい」という「常に」はどのような境遇にいてもという意味である。すべてが自分にとってうまくいつているときだけしか喜べないと思っっている人は「主において喜ぶ」という真実を学ばなければならないだろう。イエスは十字架の死の前夜の苦悩と挫折の時に弟子に「わたしの喜びがあなた方の内にあり、あなたがたの喜びが満たされる…」と語っている。

今日の使徒書でいう「喜び」は神の喜びに満たされることであり、神の臨在と切り離せない。神の愛への信頼が私たちの喜びの源泉である。だから苦難においても、迫害のもとでも、挫折の時でも、不幸な時でも喜ぶことが

出来る。パウロはいつ処刑されるか判らない囚人として獄中からこの手紙を書き送った。だから「獄中書簡」といわれる。しかも自分自身が喜びに満たされて信徒たちにも「喜びなさい」と勧める。これが「主において喜ぶ」ということである。

今日の福音書では神の婚宴の喜びに招かれた客の中に礼服を着ていないものが追い出される。神の国に入るには「新しい人を身に着け」て入るのである。新しい人とは陰鬱な律法主義でなく、神の祝宴の招きに喜びに満たされて出席する人のことである。

(450号 1993年10月10日)

## 『皇帝のものは皇帝に、神のものは神に』

マルコ伝の日程ではこの日は火曜日、その週の金曜日に十字架で処刑される。

エルサレムの神殿境内で祭司長やファリサイ派などイエスを殺そうとする人々がイエスをわなにかけようとしきりに質問を仕掛けてくる。そのたびにイエスは後世に残る有名な言葉で答える。この言葉もその一つである。

ファリサイ派はヘロデ派を連れてやってくる。ヘロデ派は、律法に忠実なファリサイ派のように反ローマではないが、ローマの直接支配より傀儡(かいらい)でも、同じ系統の民族に属するヘロデ王の支配の方がましと考えていた人々である。

思想的には対立するが、イエスをおとしめようとしている点では一致したので共にやってきた。質問は皇帝へ税金を払うべきかどうかということ。否とえば反ローマ的危険人物とみなされ、可ならば親ローマ的妥協主義者と

してファリサイ派など民族主義者から非難を受けることになる。

この税金問答を通して、「私は一体何者なのか？私はだれに属するのか？」というのがイエスの質問である。信仰生活は現世では政治権力に服従し、来世では神に帰依するという二つの世界を区別して生きることではない。

信仰者は今ここでの現世で神に誠実に生き抜かなければならない。皇帝の像が刻まれている貨幣で税金を払うこの世の政治のもとで妥協も回避もせず、神の像に造られた人間として、常に政治の権力を超えた神の権威に属していることを証しすることが信仰生活なのである。

(451号 1993年10月17日)

## 『山田主教を偲んで』

「マコちゃん、主教になったら、もう頼る人はいないぞ、神様だけだぞ!」。主教任期の終わり頃になると主教は涙もろくなり、話し方もたどたどしくなっていたが、振り絞るような声で言われた。私が後任として主教に選ばれた年の暮、国際文化会館で主教事務の引継ぎということで昼食を共にした時、山田主教が言われたのはそれだけだった。

山田主教の在職中、常置委員として主教のもとで補佐をさせていただいたが、その関係はどちらかというところよそよそしいものだった。

ずっと以前まだ私が神学生だったころ、留学帰りの新進気鋭の先輩聖職として親しくお付き合いさせていただいていた。そのころ山田主教はわたしをマコちゃんと呼んでいた。主教と常置委員の関係にあった期間は一度もそのように呼ばれたことはなかったが、久しぶりで「山田先生」と「マコちゃん」

の関係に戻った。「当分頼りにさせていただきます」と答えて事務引継ぎを済ませた。だが、その頼りにしていた時期も終わってしまった。主教就任直後から健康を害されたが、わたしにとっては居て下さるだけで頼りだった。

深い感謝と共に山田主教を神様の永遠の愛にお委ねしたい。

(451号・付録 1993年10月17日)

『愛の戒律』

掟の中でどの規定がいちばん重要か。当然「神を愛しなさい」ということである。しかしイエスは「あなたの隣人を愛しなさい」を同列に置かれた。

有名な16世紀の修道女アヴィラのテレサは「私たちは肉体的存在としては神と共に生きることは出来ませんが、隣人を持つことは出来ます。隣人が共にいることは、私たちと共に神がおいでになるのと同じように、愛の奉仕のために良いことなのです」と言っている。

聖書では「隣人」を愛することを教えるが、同時に「隣人とはだれか?」という質問を繰り返し問いかける。自分の好みで隣人を安易に決めてしまわないためである。その答えが今日の旧約の日課で提示される。寄留者、寡婦、孤児、貧しい人など、つまり私達の社会から外れそうな人々、無視されそうな人々である。新約聖書では隣人は必ずしも近くにいる親しい仲間ではない。

神の愛は常に自己犠牲の愛である。なぜなら神ご自身は完全なお方であるから、神の愛の相手はいつも神より小さなものである。神の愛は常に与える愛である。だから隣人はいつも自分が受けるのではなく、与える対象である。したがって神の愛で愛することは、多少なりとも自己犠牲の痛みを伴う。

主イエスのご受難は神の愛の究極の出来事である。私たちが神の愛を証しするのは、このような隣人への愛の実践によってである。神を愛する掟と隣人への愛の掟は表裏一体であり、主イエスはこの二つの規定を同列に置かれたのである。

(452号 1993年10月24日)

『諸聖徒日・諸魂日』

11月1日は諸聖徒日、2日は諸魂日、いずれも死者の記念の聖日である。東京教区でも墓地礼拝が行われる。クリスマスを始めキリスト教の祝日や聖人の記念日にはもともと古代の異教の祭りに由来するものが多い。

諸聖徒日前夜はハロウィンのお祭り。昔、英国、アイルランド、フランス北部地方にケルト族が住んでいた。彼らは死者の神サムハインを信じ、その祭りが10月の下旬に行われ、この時には死者がこの世に戻ると信じていた。ケルト風お盆である。やがて英国がローマ帝国支配に置かれるとこの祭りがローマ化された。

ローマ市の観光名所の一つにパンテオンという紀元前からある丸い屋根の古い神殿がある。パンテオンとは「すべての神々」という意味である。7世紀初頭、殉教者の遺物が地下墓地から掘り出されてパンテオンに安置され、「すべての神」の神殿は「すべて

の殉教者たち」つまり「諸聖徒」の聖堂に変えられ、これが諸聖徒日の起源となった。9世紀には11月1日をローマ帝国全体で諸聖徒日として守るよう定められた。中世英語では諸聖徒日前夜はオール・ハロウズ・イブといってケルト以来の行事が伝承され、後にこれが訛ってハロウィンといわれるようになった。

新約聖書ではすべての信徒が聖人と呼ばれる。しかし中世には諸聖徒日は特別な聖人や殉教者の記念となり、普通の死者の記念は翌日にまわされ諸魂日となった。本来は信徒だけでも諸聖徒日に記念されていた。聖餐式ではすべての聖人「天の全会衆」と共に地上の信徒が神の前で感謝賛美の礼拝をささげる。

(453号 1993年10月31日)

『だから、目を覚ましていなさい』

(マタイ 25章13節)

今日のイエスの言葉は「十人の乙女」のたとえ。だれに対して語られたのか、二つのケースが考えられる。一つはファリサイ派や祭司長など宗教の指導者たち。もう一つはイエスの弟子に対して。いずれも目を覚まして主の来臨を待ちなさいという警告である。

ファリサイ派も祭司たちも祭儀や律法によって救われるため、確実な制度はすでに保持していると信じていた。従って救い主の来臨を目を覚まして待つ必要を感じていなかった。旧約日課でアモスは民が捧げる犠牲の献げ物を神は受け入れないと予言している。彼らが「勝手に造った偶像」を礼拝していたためである。偶像は目に見える具体的な金の彫像や星などの事物を神とすることである。すでに神を手に入れてしまったという信仰なので、神の来臨を待ち望む必要は感じない。このような独善的宗教のもとで、抑圧されて苦しんでいる多くの弱者がい

たが、苦しみは罪の結果とみなして排除された。アモスは「正義を…尽きることなく流れさせよ」と警告する。

マタイの福音書が書かれた頃の教会でも同じように「自分たちはすでに救われてしまった」と自己満足して、主を待つ必要を感じないクリスチャンがいたようである。十字架の苦難を無視する信仰である。当時キリストの弟子の中にも待ち望む信仰を軽視する者がいたらしい。花嫁—救い主の到着を注意深く準備する賢いおとめと準備を怠っている愚かなおとめのたとえは、主の再臨を前にして今をいかに生きるかを告げる。

(454号 1993年11月7日)

---

《聖霊降臨後第24主日》

『主よ、どうか主の民の心をふるい立たせてください』

文語祈祷書では降臨節前主日、つまり教会暦の最後の主日の特祷である。「ふるい立たせ」からこの主日を「振起の主日」「スターアップ(STIR UP)サンデー」と呼ぶ習慣がある。英国ではクリスマスプディングの材料をかき混ぜて(スターアップ)降誕祭の準備を始める季節である。年度の終わりに澱(よど)んだり、固まったりした信仰心をもう一度かき混ぜてふるい立たせ、新たな心で降臨節を迎え、主イエスの来臨の準備をすることになる。

旧約日課はゼファニヤ書。「主なる神の御前に沈黙せよ。主の日は近づいている」。主の来臨を迎えるにふさわしい態度は沈黙である。ゼファニヤ書はあまり読まれないが、主の来臨を迎える人々について非常に重要な預言である。「わたしはお前の中に苦しめられ、卑しめられた民を残す。彼らは主の名を避け所とする」(3章12節)と、主の来臨のとき破滅を免れて救い

主に出会える幸いな人々がいることを示唆する。当時ユダ王国は宗教的、政治的諸党派の論争で喧騒を極めていた。その中で静かに忍耐深く主の来臨を待ち望んでいる敬虔な貧しい人々がいたらしい。社会一般からは無視されていたが、ゼファニヤは主の降誕を証しする彼らの役割を見抜いていた。主イエスの誕生に登場するのも、このような人々である。現在の社会も教会もさまざまな論議でどちらかというとかましい。せめて降臨節には自分の主義主張、思い煩いをしずめて、祈りと黙想のうちに主を迎える時を待つように自分の心をふるい立たそう。

(455号 1993年11月14日)

---

《降臨節前主日》

『この最も小さいものの一人にしたのは、  
わたしにしてくれたことである』

(マタイ 25章40節)

今日の日課のテーマはどのようにして主イエスに出会えるかである。その鍵がこのイエスの言葉である。

「この最も小さいものの一人にしたのはわたしにしてくれたことである」イエスは子供を抱きあげ「このような子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである」と弟子に告げられたこともある。イエスはご自分の姿をこの世の「幼児」や「最も小さい者」に重ねて示される。

カザンツァキスの『再び受難したキリスト』という小説の中にメノリオスという修道士が出てくる。長い間貯金して宿願だったエルサレム巡礼旅行に出掛けることになった。同僚に見送られ出発するとすぐに戻って来る。門の外の道端に物乞いがいた。せっかく蓄えた旅費をすべて与えてしまった。「わたしはあの貧しい男が誰であるかわかったのだ」と同僚に語る。彼らは

「誰だったのだ」と問いただすとメノリオスは「キリストだ!」と答える。キリストはエルサレムまで行かなくても修道院の塀の外の道端にいた。

私たちがまもなく迎えるクリスマスの出来事はロマンチックなおとぎ話ではない。私たちがこの世の「最も小さいもの」に出会って、仕える時そこに思いがけなく神の子イエスの臨在に気付くことを示唆する。マザー・テレサも聖餐式で記念するキリストの受難は瀕死の貧しい病人に仕えることにつながることを語っている。

来週から幼子イエスを迎える準備の期間、降臨節が始まる。

(456号 1993年11月21日)

---

《降臨節第1主日》

『降臨節のリース(アドベントリース)』

今日から降臨節。クリスマスの前の4週間はキリストの来臨の準備と再臨の待望を強調して過ごす季節である。

クリスマスにツリーを飾るように降臨節にはリースを飾る習慣がある。木の枝で作った輪でろうそくを主日ごとに1本ずつ4本、クリスマスイヴにはキリストの来臨のしるしとして真ん中に最後の1本を立てる。キリスト教以前の太陽崇拝の名残でももとは太陽の象徴である車輪を飾ったらしい。冬至直前の闇の時間が最も長い時期に太陽神に光と命の回帰を祈願したのである。やがて冬至を迎えると太陽の輝く時間が長くなり光の支配と勝利のしるしが明らかになる。クリスマスもローマの不滅の太陽神の祭りになって冬至直後に定められた。

降臨節は教会暦では新年で聖書日課もB年に変わる。4つの主日はそれ

ぞれ準備と待望の信仰生活について中心的なテーマがある。

第1主日「目を覚ましていなさい」

第2主日「主の道を備えなさい」

第3主日「喜びなさい」

第4主日「お言葉どおり、成りますように」

最近は降臨節のリースを飾る教会が多くなってきた。神様のことを理解するためには人間の言葉だけでは不十分で、美術や、音楽など象徴によって把握することが必要である。降臨節のリースもその一つである。それぞれの主日にはリースのろうそくの光を見つめながらその主日の特祷、旧約、使徒書、福音書を読み、主日のテーマを思いめぐらすことをお勧めしたい。ただし火の用心にはくれぐれもご注意を!

(457号 1993年11月28日)

---

《降臨節第2主日》

『主の道を備えなさい』

(マルコ1章3節)

新約聖書ではキリストはしばしば『来たるべき方』という称号で呼ばれる。この世に、また罪人の中に「来たる」と言うことがキリストの大事な使命だからである。降臨節は、小鳥が鳴きはじめることが冬の終りと春の到来のしるしであるように、『来たるべき方』の来訪が近づいたしるしに気付いて喜びをもって準備をしながら待ち望む時である。主イエスの福音の到来を告げしらせることもある意味では福音である。

洗礼者ヨハネは旧約日課の「良い知らせ(福音)を伝える者」の姿をとっている。しかしヨハネの福音はあくまでも、「準備の福音」である。彼の福音は「私よりすぐれた方が、後から来られる」である。ヨハネは「わたしは『来たるべき方』ではない」と繰り返し否定し、その方の来る道を備える者であることを伝える。彼は備えのために社会に正義を実現しようとする。ヘロデ王

の不道德を批判して迫害され、果たしてイエスが本当に『来たるべき方』なのだろうかと迷ったこともあった。しかし「わたしは喜びで満たされている。あの方は栄え、わたしは衰えねばならない。」と言う信念で殉教する。「道を備える」ということには、今まで保持していた自分の信念の問い直し、悔い改め、迫害、謙遜が必要である。それを甘受できるのは神の愛への絶対信頼に基づく希望である。

11月30日は聖アンデレ日。彼は日常の行動で備える役割を果たした弟子である。先にイエスに召されながら弟ペテロをイエスに紹介し、やがてペテロは兄を超えて弟子の指導者となり、初代教会の最高指導者となる、

(458号 1993年12月5日)

---

《降臨節第3主日》

『喜びなさい』

降臨節第3主日のテーマは「喜びなさい」である。降臨節は希望のうちに待つ信仰を強調する時であるから、良いことがすでに実現したからではなく、まだ実現に至らない待つ過程で希望に生きる喜びである。

旧約日課はイザヤ書の新しく創造される天地の預言。「創造」と言う言葉が繰り返し語られる。神様が現在の世界を新しい天と地に造り変えてくださるビジョンの予言である。使徒書はテサロニケの信徒への手紙。「いつも喜んでいなさい」と勧めるが、「絶えず祈りなさい」と続く。今日の特祷のように「わたしたちは罪に妨げられて、馳せ場を走るのに苦しんでいます」と言う忍耐して待つ状態で喜びをもてるのは、祈りによって神と一緒にいてくださるという確信を失わないでいることが前提である。パウロはその状態の中で「良いものを大事にしなさい」(テサロニケ I 5・21)と勧める。

福音書は洗礼者ヨハネのメッセージである。彼こそあらゆる罪の妨げを克服して、良いものを固く保持して救い主イエス到来の道を備える事に徹した人物である。当時はまさに馳せ場を走るのに苦しんでいた時代である。混乱に満ちた社会で神の明確なみ心を伝える者を求めていたが、「今は預言者もいません」と言う時代だった。ヨハネが荒野で語り始めると、人々は彼こそ昔の預言者の再来あるいはメシアであることを期待する。ヨハネはあくまでもそれを否定して、ただ自分は「良いお方」の到来を叫ぶ者と告げる。だから彼の喜びは自分が衰え、あの良いお方(キリスト)が栄えるビジョンだった。

(459号 1993年12月12日)

『さあ、ベツレヘムへ行こう』

(ルカ2章15節)

現代のエルサレム旧市街はいつも観光客と物売りであふれている。周囲の乾燥した山々から吹き下ろす風でたいへんほこりっぽい。ベツレヘムも風景は美しいが大体同じ雰囲気である。ナザレでは私はコートや現金を紛失したことがある。

「むかしの聖地はこんなひどくなかった。今はナザレもベツレヘムもエルサレムも観光客と物売りが群がる混雑した汚い町になってしまった。社会情勢が不安定で物騒な処です。本来のナザレはもう見られませんか」と敬虔そうだが物知り顔の旅行者のつぶやきを聞かされた。しかし本当にそうなのだろうか。イエスの時代のエルサレムは神殿の中も物売りで一杯だった。宗教的、政治的対立も激しく喧騒だった。反ローマ運動も激しく、いわゆるテロリストも横行していたようだ。現代と同じように物騒だったと思われる。

「善いサマリア人の話」によればエ

リコへの道には強盗もいた。神殿礼拝から排除された「罪人」と呼ばれて差別され苦しむ人々がいた。イエス誕生当時の聖地は今とあまり変わらない状態だったのではないか。この旅行者はイエスの生誕の地をロマン化し過ぎているようだ。

モーセの時代に神はエジプトで苦しむ人々の叫びを聞いて彼らを救い出された。同じように神は混乱と不正に満ちた世界で救いを待ち望む人々を顧みられて、イエスを救い主として誕生させられた。

(460号 1993年12月19日)

## 『「来る」イエスと「行く」イエス』

クリスマスも終り顕現節を迎えました。降誕節はイエスのベツレヘムの誕生のお祝いですが、続いて迎える顕現節はイエスが私たちの世界全体に来て下さったことの記念です。したがって顕現節の福音書はガリラヤの人たちに現れる30歳のイエスです。イエスの洗礼、弟子の招集、福音書の最初の部分に書かれている初期の宣教の働きがテーマです。今日の福音書は弟子の招集です。

イエスはアンデレや、ペトロ(シモン)、ヨハネとヤコブに「私についてきなさい」と告げます。

降臨節や降誕節で迎えた「来る」イエスが今や私たちが従っていく「行く」イエスに変わります。立ち留まっていれば離れ去ってしまうイエスです。やがてイエスはガリラヤからエルサレムに行く決心をします。その時「イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた」(マルコ10・32)と書いてあり

ます。

聖書では神に招かれて神の前に立った人は出会った状態のままに留まることは許されず、必ず「行きなさい」といわれます。また「従ってきなさい」と告げられます。イエスに従う弟子の道は決断する勇気が必要です。聖餐式でイエスの体と血にあずかると、「主とともに行きましょう」と出発の宣言をします。神に出会った者はこの世界に派遣されるのです。

顕現節の次は大斎節です。イエスを迎えて喜びを体験した私たちは、私たちに先立って進むイエスのうしろ姿に気付きます。やがて迎える大斎節にはエルサレムの十字架に向かって進むイエスに従うことを学びます。

(462号 1994年1月23日)



1930年、聖路加国際病院のチャプレンだった竹田眞二司祭の長男として東京・築地で生まれた。立教大学、聖公会神学院卒業後、米ユニオン神学大学に留学。70年聖公会神学院校長、88年東京教区主教、98年首座主教などを歴任し、女性司祭や信徒の奉仕職などの課題に取り組んだ。2021年9月13日逝去(91歳)



1999年1月6日(顕現日)聖アンデレ主教座聖堂にて、笹森田鶴、山野繁子両執事の司祭按手式が行われ、東京教区で初の女性司祭が誕生した。平和の挨拶での、喜び祝う竹田主教と新司祭の「主の平和」

## 主日の要点 ～竹田眞主教の聖書講解～

竹田主教の教区時報に残された主日の講解は、私が広報委員長になったときからいつかまとめたいと思っていました。

今回、佐々木道人司祭にお願いして、原稿を打っていただきなんとか一つにまとめることが出来ました。本当に感謝いたします。

内容は教区時報が毎週出されていた時の1992年12月から1994年1月までのもので、主教には毎回たいへんなご苦勞をかけたと思います。聞くところによると、書く字数が少ないので、毎週俳句を作っているようだと言っていたそうです。

ただ内容はとても要点を得た素晴らしいもので、やはり今これを多くの人に読んでもらいたい、そしてあらためて聖書の豊かなメッセージに触れてほしいと思います。

そして最後になりましたが、あらためて竹田眞師父の魂の平安をお祈りしたいと思います。

前広報委員長 渡辺康弘